

氏名	吉原 千鶴
学位の種類	博士(経済学)
報告番号	甲第391号
学位授与年月日	2015年3月31日
学位授与の要件	学位規則(昭和28年4月1日 文部省令第9号) 第4条第1項該当
学位論文題目	A.C.ピグーの経済学 ーケインズによる「古典派」 経済学批判の視点からー
審査委員	(主査) 藤原 新 服部 正治 荒川 章義

I. 論文の内容の要旨

序章では、研究史の整理が行われ、本論文の立場が確認される。従来、ピグーについての研究は、ケインズによって批判的に描かれた「古典派」経済学の代表者という前提で進められる傾向にあった。このような研究は、一般にケインズが批判したピグーに関する記述をピグー経済学そのものであると捉える傾向にあり、ピグー経済学についての理解を部分的で不十分な状態に留めてしまっていた。さらに、このような事情に起因するピグー研究の遅れがケンブリッジ学派全体についての理解をも損ねてきた。これに対して、近年、ケインズの目を通さないピグーの経済学それ自体の研究が行われるようになってきている。しかしながら、本論文は、これらの研究がピグー経済学における主要な論点をほぼ網羅し、「ケインズ革命」に対するピグーの積極的な貢献を強調することでピグー研究の水準を飛躍的に高めることに寄与したと評価しつつ、ピグーに内在するあまり、ケインズがピグーを批判したことの積極的意味を十分にはとらえきれていないと判断している。本論文は、ケインズがピグーを批判した論点を一つ一つ取り上げて、それらの論点についてピグーの具体的な主張を丹念に見ていくことで、ケインズからみたピグーではないピグー自身の経済学の特徴を明らかにするばかりでなく、ケインズとピグーの真の対立・継承関係を捉え直すことを企図していることが示される。

第1章「ピグーの経済学におけるリスクおよび不確実性の概念」

ここでは、ピグーの経済理論における不確実性が扱われている。ケインズは、「古典派」経済学者が経済活動にともなう不確実性を単なるリスクとして扱っているとして「古典派」を批判した。第1章ではこの点に関連するピグーの著作を検討し、ピグーは静態の理論では確かに不確定要素をリスクとして扱っており、この点についてはケインズの指摘が妥当であるものの、産業変動の理論においては不確定要素をケインズ的な真の不確実性として扱っていることが示される。静態理論でのリスクは、「古典派」経済学の基本的理論構造と矛盾なく不確定要素を理論に導入する工夫であり、一方、産業変動論での不確実性は、現実の経済活動の実体を踏まえた上で産業変動の説明要素のひとつとして経済理論に導入されたものである。そして、これら2種類の不確実性概念が同時に体系に併存している。以上の考察から、不確実性の問題に関して、ピグーのなかには基本理論のさらなる精緻化という志向と、より現実に接近した仮定の導入によって理論を現実認識に役立てようという志向とが同時に存在することが明らかにされている。

第2章「ピグーの経済学における『資本のもとのままの維持』」

ここでは、資本減耗の取り扱いが検討されている。ケインズは、ピグーの「国民分配分」は実物概念であるのに、資本減耗を考慮する際は資本価値の変化を導入しているとして批判した。これに対して第 2 章では、経済学的原則に基づいて資本減耗を考察する際のピグーの基本的立場は、価値の変化ではなく資本の物的減耗のみを考慮すればよいというものであることが示される。そして、この特殊な主張の背景には、ケインズとは違って、資本を「物的生産力を有するもの」とみるピグーの資本観があることが指摘される。本章では、実務家たちが資本に物的な損耗がない場合でも価値の減少である陳腐化による減耗を現実には考慮している事実を受け、この現実を自らの理論に取り込むことを意図して模索したピグーの姿が描かれる。ここではその著作、版ごとの記述の変化の経緯を丹念にたどった結果、ピグーは行きつ戻りつしながら、しかも最後まで満足できる解決策を提示できなかつたと評価が下されている。その上で、資本減耗の取り扱いの問題に関しても、ピグーのなかには上述の 2 つの方向が同時に並列的に存在する結果となっていると結論付けられている。

第 3 章「ピグーの経済理論および政策提言における賃金率と雇用量の関係：賃金の 2 つの側面をめぐって」

ここでは、ピグーの経済理論における賃金率と雇用量の関係が扱われる。ケインズは、賃金の引き下げが失業を減少させるという「古典派」経済学の理論的帰結を批判した。第 3 章では、貨幣賃金率の引き下げをめぐってもピグーの経済理論の理論的帰結とその政策提言との間に乖離が存在していることが指摘され、その理由が検討されている。本論文では、ピグーの主張を具体的に検討した結果、ピグーは『失業の理論』において、高い賃金率が失業の原因になることを論理的に示した一方で、同時期に失業解消策に言及する際には、一度も賃金率切り下げを主張していないことが明らかにされている。さらに、このような理論的帰結と政策提言との間の乖離は、ピグーが賃金率に「生産要素に対する報酬」という側面と「生計を維持するための原資」という側面との 2 つの側面を見いだしていたことにその原因があると主張されている。

第 4 章「ピグーの公正賃金論とナショナルミニマムの必要性」

ここでは、第 3 章での議論を強化するために、ピグーの公正賃金論がマーシャルの公正賃金論との比較から論じられている。ピグーの公正賃金率は、マーシャルとは異なり必ずしもその社会における生存費を保障するものではないことが示される。第 4 章の主張によれば、両者の相違は、労働供給についてのそれぞれの仮定が異なることから生じている。ここでは、全労働者が最適に配置され、能率に見合った賃金を受け取る場合に成立する賃金率を公正賃金率と定義したピグーの理論では、労働者がある水準以下では働かないと決めた場合（制度がそれを強制している可能性もある）、その賃金は公正賃金ではなく、その賃

金に見合わない能率の労働者が失業するという整理がなされている。これは、ピグーによる賃金理論の徹底とみなすことができる。一方、労働供給が賃金率の水準と切り離されて論じられている以上、たとえ公正賃金の実現し、国民分配の最大化が達成されている状態であっても、「公正だが非常に低い賃金率」しか受け取れない労働者が存在する可能性があることを意味する。本論文では、ピグーの公正賃金に関する議論はこのような労働者の存在を理論的に基礎付けたことに意義があると評価する。その上で、ピグーは労働の最適配置という賃金率の理論上の役割を重視し、それを徹底した結果として不十分な生活環境におかれる労働者に対しては国の福祉の問題として対処するべきであると示唆していることが示される。以上の検討から、公正賃金をめぐる議論においても、賃金理論の基礎を確立するという理論的精緻化を志向しつつ、その徹底によって生じる矛盾を福祉的政策によって解決しようと試みるという、理論の徹底と現実への対応という両方向への志向がピグーのなかに存在していることが明らかにされている。

以上の検討を通して、ピグーの経済学における経済理論のさらなる精緻化を目指すという方向とその理論の現実への適用を工夫するという方向の間には、検討した論点すべてに共通する関係が存在することが明らかになったとされる。両者は基本的には整合性が曖昧なまま、あるいはときには矛盾する形でピグーの経済学体系内に併存するのである。

補論では、以上のようなピグーの賃金論と比較されるべきケインズの賃金-雇用の関係が検討されている。

終章においては、以上の検討を踏まえて、ケインズによるピグー批判の意図が再検討されている。ピグーの基本的なスタンスは、マーシャルから受け継いだ経済理論の基本を維持しながら、そのみでは説明が難しい現実を解釈する場合や政策提言を行うような場合には、新たな要素を基本理論である静態の理論に付け加えるかたちで取り扱おうというものである。ピグーにとって静態の理論の精緻化を行うことは現実分析の基礎となるステップであるとされたが、現実には、静態理論の理論的彫琢と理論の現実への応用は、必ずしも整合的なかたちでピグーの経済学に取り入れられているわけではない。本論文では理論の精緻化と現実への対応の間で苦闘するピグーの特徴が明らかにされている。その上で、ケインズの批判は、現実への対応を重視しながら、しかし形式的な静態の理論を乗り越えることのできなかつたピグーに対して向けられていると考えるべきだと指摘される。ツールとしては「古典派」と同様のものを多く使用しつつも、それをを用いてまったく新しい経済理論を構築したケインズにとっては、ピグーのこのような折衷的な方法こそが批判の対象であったと理解すべきであると結論付けられる。

II. 論文審査の結果の要旨

本論文の課題は、ピグーの経済学にみられる 2 つの方向、すなわち経済理論の精緻化という方向と現実への対応という方向の間に存在する関係を、不確実性の扱い、資本減耗の扱い、賃金率と雇用量の関係、公正賃金論という個別の論点に関して描き出すことである。

ピグーは、経済学の理論的彫琢を進める際と、現実が生じている問題を考慮し、場合によっては政策提言を行う際とで、表面上はまったく異なる結論を導くことがある。本論文は、上述の四つの論点についてピグーの言説に沿って具体的に検討することで、理論の精緻化と理論の現実への応用という 2 つの方向がピグーの経済学体系にどのように併存していたのかを検討している。従来の研究史においては必ずしも十分に注目されてこなかったこのような視点からピグーの経済学の重要な性格を明らかにしたところに本論文の特徴がある。

従来のピグー研究は、概して、①ケインズ研究の一環として、ケインズが批判したピグーをピグーの経済学そのものであるととらえ、そこに見られる問題点を指摘する傾向を持つものと、②上記の研究に対する批判として、ピグー自身の経済学に内在し、その議論を精査することで、ケインズの議論の多くはピグーに既に存在していたことを明らかにするもの、に分かれる。

後者においては、ケインズが批判するピグーは、意図的に作られた「藁人形」とであるとみなされ、そうした形でのピグー批判は適切でないことが主張される。

本論文はこうした研究状況にあって、ケインズがピグーを批判した箇所を一つ一つ丹念に検討することによって、ピグーには、特に現状認識や政策提言の部分において、確かに②の論者が主張する通りにケインズの議論の先取りとみなされるべき部分が多くあり、ケインズのピグー批判は、ピグーのある部分のみをとらえた一面的なものであること、しかし、ピグーの経済学、特にその理論の部分は、ケインズの批判を受けるに値する内容があり、ケインズの批判は、確かに一面的であるものの、決して理由のないものではないこと、を具体的に明らかにしている。

ピグーの理論と政策に見られるこのような二面性は、マーシャル以来、理論的整合性と現実への適合性の両面を重視するケンブリッジの特徴の現れだとみなすことができる一方で、その両者を整合的に説明しようとしながら、必ずしもそれに成功しなかったピグーの苦闘を物語るものだといえる。ケインズのピグー批判は、現状を正しく認識し、それにふさわしい政策提言を行いながら、その認識を経済学に組み入れることのできなかつた（あるいは伝統的な理論構成から離れることができなかつたためにあえて組み入れることを避けた）ピグ

一の経済学に対するものであると、本論文は主張している。このように、従来のピグー研究では具体的な形では必ずしも十分に明らかにされてこなかったピグーのこうした二面性を、具体的資料に基づいて明らかにし、ピグーの経済学に従来より一歩進んだ性格規程を与えていることが本論文の大きな貢献である。

さらに、本論文は、ピグーとケインズとの関係についても、両者の間にある「断絶性」と「連続性」というアンビバレントな性格を析出している。これまでともすれば「断絶性」と「連続性」の二者択一の議論が行われていたことを考えると、この両者の関係に新しい光を与えたところに本論文の大きな価値がある。この成果は、「ケインズ革命」に対して新しい評価を与える際にも一定の貢献をなす可能性を強く持つものである。

とはいえ、本論文には、今後課題とすべき点も存在する。

第一に、この論文の性格上、ピグーの経済学全体が取り上げられていないという点である。本論文で得られた視角から、本論文で取り上げられなかったピグーの他の論点を見直すことによって、ピグーの全体像に対して新たな解釈が可能になると思われる。

第二は、本論文がピグーのみならずケンブリッジ経済学全体に対しても、その性格規程に一定の貢献をなす可能性を持ちながら、ピグー以外の論者についての言及が極めて限られていることである。本論文の視角からピグー以外のケンブリッジ経済学を見直すことができれば、さらに大きな成果が得られる可能性がある。

ただし、以上の点は、本論文の目的を超える課題であり、今後の研究の進展により徐々に明らかにされるべき論点であって、博士論文としての本論文の価値を損なうものではない。